

## 第 92 回麻布獣医学会 一般学術演題 17

## CT 検査で体位変換による結腸の変位が確認された馬の腸結石症の 1 例

○中前 陽子<sup>1</sup>, 石原 章和<sup>1</sup>, 佐々木 直樹<sup>2</sup>, 山田 一孝<sup>1</sup>

<sup>1</sup>麻布大学 獣医学部, <sup>2</sup>帯広畜産大学 臨床獣医学研究部門

### 【背景】

腸結石症とは、結腸内に形成された結石が原因で、消化管の通過障害を起こす疾患である。腸結石は、主に背側結腸、横行結腸や小結腸で形成され、診断は通常腹部 X 線検査によって行われる。

### 【症例】

症例は、18 歳齢のポニー、体重 160kg で、慢性の消瘦および食欲不振の症状を呈し、X 線検査において腹底部に結石が確認された。X 線像から、結石は腹側結腸に位置すると推測された。

### 【方法】

CT 撮影は、麻酔導入後、腹臥位を維持したまま CT 寝台に乗せて、体幹部全域を撮影した。その後、仰臥位に体位変換し、再度 CT 撮影を実施した。

### 【結果】

CT 検査では、背側結腸の横隔曲に約 100mm の腸結石が確認された。腹臥位の撮影では、結石の重みで背側結腸が腹底まで降下していた。また、体位を腹臥位から仰臥位に変換することで、結石および結腸は背側に変位することが確認された。さらに、結石の中心に金属を示唆する高吸収領域が認められた。背側結腸切開術により、最大長径 104mm、重さ 422g の結石が摘出された。摘出した結石の CT 撮影を行ったところ、結石の中心にホッチキスの針のような形状の金属異物が確認された。術後、症例は順調に回復した。

### 【考察】

一般的に、馬における CT 撮影は四肢や頭部に限定される。今回は、大型 CT 装置を使用することで、馬の体幹部の CT 撮影が実現した。また、CT 検査によって、X 線検査では確認できなかった結石の重みによる結腸の変位、および結石内部の金属異物を確認する事が可能であった。手術時と同じ体位で手術前の CT 撮影を行うことで腹腔内臓器の位置が正確に把握可能であると考えられた。さらに、病変部位の特定、及び通過障害の有無も加えて把握可能であることが示された。

